
人間不信の異常で過負荷な少女、そして百鬼夜行の主。

姫崎明李夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間不信の異常で過負荷な少女、そして百鬼夜行の主。

【Nコード】

N0287V

【作者名】

姫崎明李夢

【あらすじ】

舞台はぬらりひよんの孫、浮世絵町。

主人公は浮世絵町のとある屋敷に住む異常で過負荷で人を信用できない少女。

奴良組次期三代目は少女に何かを教えてあげられるのか…？

第壱幕「鴉」（前書き）

舞台は日本のある町…
浮世絵町——

第壱幕「鴉」

ある所に一人の少女が居ました。

「ちゃんっはやく〜!」

「よろしくな。」

「は良い子ね?」

「は何でもできるな!偉いぞー♪」

「大事にする…。」

少女はとても美しく、いかなることも一人で成しえました。
そんな少女は誰からも好かれる人でした。

「こないで…!!」

「何なんだよお前…?!」

「ひ…っ!!なにっ何なのよ?!」

「このっが…!!」

「お前みたいなのはな…売れば金になるんだよ…」

でも、少女のそばに居る人はいっしか少女を利用する人や少女を恐れる人だけになっていました。

その人々は始めからそうだったわけではありませんでした。
少女が何をした訳でもありません。

ジャア、ナゼ変ワツテシマッタノ?

答えはいたって簡単。

人々は知ってしまったのです。

少女の“ヒミツ”を…

――――

「…」

ここは浮世絵町内うきよえちやうないのとあるお屋敷。

そこでは一人の少女が縁側でうたた寝をしていた。

…していた、ということであくまでそれは過去形なのだ。

「なんだ、この鴉。」

つか僕の眠りを妨げるとか良い度胸だね。

何かいきなり空から降ってくるし…。

現在は地面に突き刺さったそれを引っ抜いて抱きかかえる。

そんなでもってこの鴉は何処から見ても普通の鴉ではない。

何か帽子みたいのかぶってるし？着物着てるし？体の形が普通の鴉じゃないし？

言うなれば伝承とかの鴉天狗の鼻が長くないVersionで、嘴付き、みたいな。

「ん…」

特に目立った外傷はないけど何か気絶してるみたいだし…。

寝かしとこうか。

「よっ…と！」

一回鴉もどきを宙に投げる。

そして目を瞑ると手が光り出す。

次の瞬間手にはミニチュアサイズの布団。

投げた鴉もどきはその布団の上にポフ、と音を立てて落ちた。

…うん、サイズは丁度良いな。

それを確認して僕は屋敷の中に入って行った。

第貳幕「初めまして、妖怪。いや、鴉もどき!」（前書き）

現在の時刻、22..49orPM10..49。

「助けていただきありがとうございました。」

そう言って目の前で小さなからす…鴉もどきが頭を下げた。

第貳幕「初めまして、妖怪。いや、鴉もどき!」

「おお…」

ちよつと感動した。

疑問符を頭に浮かべた鴉もどき。

鴉が喋ってる!! 鴉が喋ってるよ!! もどきだけどね!

「…ま、いいや。鴉もどき、なんか食うか?」

「私は鴉もどきではなく妖怪の鴉天狗で御座います。」

よーかい…っていうとあれか。あの何か人間の書物に出てくる架空の生物か?

…とりあえず、人間以外にも人間の言葉を離す生き物が居たのは嬉しい。

人間は好きどころか大嫌いだから初めての話し相手になる、かもしれないね。

「そか…。因みに僕は龍ヶ崎麗だ。鴉天狗、なんか食うか?」

「いえ、お気になさらず。所で此処は何処でしょうか?」

「僕の家。何か僕が庭寝てたら目の前にお前が落ちてきて気絶してたから連れてきたんだけどな。」

因みに僕は一人暮らしだから親とかは気にしないでいーよ?

「そうですか…。ではお世話になりました。」

そう言って羽を広げた鴉天狗

「…麗ちゃんちょーっぷ」

…の頭にチョップをぶち込んだ。

へブッ?!とよく分からないうめき声をあげて床に落ちる鴉天狗。

うーん、妖怪でもこんなちびじゃーねえ…

まあ、始めて妖怪とか見たから基準は特にないが。

「なっ何をッ?!」

「や、また人様の家に落っこちられても困るから送るよ。」

「いえっ!結構です!!」

「…黙って家の場所思い浮かべてくれないか?」

有無を言わせない笑顔で遠回しに“助けられた身だろ?てめえに拒否権はねえんだよ”と言う意思を表情に表す。

するとため息を吐いて「分かりましたよ…」という鴉天狗…いやもう鴉もどきでいーや。

それでも何をするのか分かっていないようだ。

それから僕は黙って鴉もどきの頭に手を添えた。

うん、ちゃんと思ひ浮かべてるね。

なんでわかったかはまた後々。

そんな事を思った次の瞬間。

パツと周りの景色が変わる。

そして鴉もどきと僕の体が空中に投げだされた。

…もちろん重力に従って落下していく訳で。

あーもう。空中のイメージだったの分かってたけどめんどくさいな
!…。

段々と地面が近くなる。

そろそろ、か。

地面に向かって手を突き出す。

「…ラフラフレンシア荒廃した腐花」

手が地面に触れて腐葉土になり、スポンジくらいの硬さに変化する。
ふむ、地面が土でよかったな。

結構な早さで落下したため地面がスポンジくらいと言えど痛いかなー…。

いや、平気なんだけど。

煙と結構な音により人が来る。

…多くない？

軽く500入るんじゃないか…？

しかも全員人間じゃないっぽいし。

納豆みたいなのとか無駄にでかいのとか目がいつ個しかない人とか
無駄に肌が白すぎる人とか首がない人とか。

「えー…と。こんばんわー、お届けものでーす…」

適当な言葉を放ち、近くに居た黒っぽい羽が生えた少年に鴉もどきを渡す。

「お…親父?!」

「おお、黒羽丸か!」

「え、似てないね。」

独り言のようにそう発した。

何か睨んで来る黒羽丸君（？）

「…あ、お父さんにちゃんと言っというてね？ 今度から人様の家に墜落するような事はないようにって。あと地面すいませんでした。」

そう言ってまた小さく呟く。

「大嘘つき《オールフィクション》」

すると一瞬にして地面が元通りになる。

「…とまあ、こー言うことで勘弁してくれ。」

さようならと付け足し姿を消した。

…てか、認識できなくした。

知られざる英雄^{ミスターアンノウン}って言うスキルなんだけどそれを使うと誰にも認識できなくなるって奴。

さっきの地面を腐らせた荒廃^{ラフラフレシア}した腐花や大嘘^{オールフィクション}つきもスキルの一つ。
おー…驚いてるねえ…。

「もしかして明鏡止水と同じ技を使えるのか…?!」
とか言ってるけどなんだそれって感じですよ。

そう思いながらまた自分の家にテレポートする。

まあ、知ってる場所ならどこにでも行ける。

何だっけな…

あ、確か腑罪証明^{デッドフロック}だったか…。

「ふあ…」

欠伸が出る。

そういえば今何時だっけ：

時計を見ると短針は11を指している。

外は暗い。

：通りで眠いわけだ。

そう思いながら色々と寝る準備を済ませ就寝した。

第式幕「初めまして、妖怪。いや、鴉もどき!!」（後書き）

初めまして明李夢と言います^^

麗ちゃんは僕っ子なだけの女の子です。

そもでもって設定的にはめだかボックスで登場した異常と過負荷は
あぶのーまる マイナス
全てON/OFF可能で使えます。

…チート？

うん、チートでも麗ちゃん気まぐれっ子だから原作に大きすぎる影響は与えないように思います。

めだかボックス？あぶのーまる？なにそれおいしいの？な人は下記のURL参照←

<http://www43.atwiki.jp/medakabox/pages/1.html>

あ、いまさらですが麗ちゃんのプロフィールを紹介←

龍ヶ崎麗（♀）＋＊

2月14日生まれの現在13歳浮世絵中学校2年生。

性格＋＊

無気力、気まぐれ、人嫌い、好奇心旺盛、僕っ子、ちょい毒舌、まれにツンデレ

容姿＋＊

黒に近い焦げ茶色の髪が腰ぐらゐまで伸びている。

顔は整っていてつららにも引けを取らないというより比べる単位ではない。

基本着物が好きで普段から来ているが学校に行く時だけ制服。

サンプルボイス＋＊

「龍ヶ崎麗。よろしくするつもりはない。」

「なんだ、随分失礼な奴だな？」

「僕の事…怖く、ないのか？」

「は…？お前、何言ってる？」

「…嫌いだ。」

「ふーん。そうか。」

…チートww

何もかもがチートだコイツwwww

第参幕「話相手」(前書き)

「ふぁ…」

現在地は僕の通っている浮世絵中学校の旧校舎内。

とある噂を聞きつけてやってきた。

夜な夜な死霊達が旧校舎で暴れてる…らしい。

昨日までは信じてなかったけど実物見たし？

願わくば話し相手にと考えた訳だ。

と、思ったら若干人の気配があってそれを避けながら歩いている。

第参幕「話相手」

「んー…」

居ないなーとか考えていると密かな呻き声。
現在地は美術準備室。

「もが…もが…」

目を向けると一つの棚。
そしてそのそばに散らばるグロテスクな液体とはみ出した手。
もしかしたらと思い棚をどかす。

「おお…」

ビンゴ。小さい女の子の妖怪が居た。

「ありがとう」

挟まっていた妖怪らしき少女はそう言って顔を顰めた。
ああ、手が…。

「平気か？」

そう言って少女の手に自分の手を翳し大嘘つきを発動する。
オールフィクション

「ん、これでいっか。」

「ありがとう…」

「いや、別にいいよ。これは僕の自己満足でやった事だしな。」

「…」

「ま、その代わりと行っちゃあ何だがな？　また僕がここに来た時話し相手になってくれ。」

そう言った僕は返事も待たずまた違う場所に向かおうとする。

それとほぼ同時だろうか不思議な気配がした。

…あの鴉もどきの気配に少し似ている。

その場所に腑罪証明で移動し、念のため知られざる英雄を発動する。
アリバイプロック ミスターアンノウン

「おお…」

その後目の前に広がった光景に思わず声を漏らす。

今現在僕の目の前にはこの前鴉もどきを送った時に居た肌の白すぎる少女& a m p ; 体格の良すぎる男。

が、なんかゾンビっぽいのを凍らせたり殴りとぼしたりしている所。多分凍らせてんのを見ると女の子の方は雪女だろうな…。

「うせな。ここはてめーらのシマじゃねえぞ餓鬼共」

ドン、と効果音がつきそうな勢いで言う男。

それに情けない声を上げて逃げて行く凍らせられていたりしていた妖怪達。

…いつの間に溶けたんだ。

その後いくつかの会話を交わした後に昨日の鴉もどき。

出て行きたい…っ

でも人間が一人居る…。

あ…あの子が居なくなったら出てても平気か。

そう思いながら鴉もどき達の尾行を始めた。もちろん知られざる英雄使用の元。
ミスターアンノウン

第参幕「話相手」 (後書き)

麗..「...みじか!!」

明李夢..「だって再会までの尾行シーンが思いつかなかったんだ!!」

第肆幕「昨日ぶり」 (前書き)

現在地…昨日の鴉もどきを送った場所。

ん、昨日も思ったけどやっぱでっかいよね。
僕んちと良い勝負かも。

そんな事を思っていると1匹と3人は昨日の家に入って行く。
そんなもって僕もそれに続く。

うん、そろそろ良いかな…

第肆幕「昨日ぶり」

鴉もどき達の前に立って
ミスターアンノウン
知られざる英雄を解く。

「「「「っ!?!」」」」

「昨日ぶりだな、鴉もどき。」

そう言って軽く笑う。

「あなたは昨日の…?!」

「麗殿…!」

「えっ? 青、この人だれ!? 知り合い?!」

まあ、こんな感じで反応は様々。

その声に他の人々? も集まってくる。

「そうそう、麗だ。因みに敵じゃないから安心してね?」

いや、だって雪女とか超睨んで来るし…。

「何の用だ?!」

と青と呼ばれた男に言われ、少し考える。

…これといった用はないんだけどね…。

「…暇だったから、話し相手がほしかったんだが…」

そう言うと全員何故か気の抜けた顔をする。

…？

「麗殿…それで何故ここに来るのですか？」

「だってここに普通の人間はいないだろ？僕は人間は嫌いだし…。その少年達も人間の姿してても妖怪だろう？…まあ、眼鏡の少年はちょっと特殊なようだけどな。」

そう簡潔に話をまとめた僕は目の前で慌てる少年をスルーしてそのへんに居た異臭のする妖怪やら子鬼やらを5匹くらい掴む。

「という訳でお前ら、僕の話し相手になれ。」

そう言って僕は適当な大きさの座布団を人数分つく創りそれに座る。

「「「「…」」」」

啞然とする妖怪たち。

…まあ、普通いきなり会った奴にこんなこと言われても驚くか。いや、いきなり座布団とかが出たのに驚いてんのか…？

「…そんなに驚くものか…？」

「「「「いや、驚かない人が居たほうが吃驚だろ」」」」

「おお、ナイスハモリ！」

（1時間後）

「んじゃ、僕はそろそろ帰るな？」

「おう！またな、麗さん！！」

1時間話してるうちに結構気が合って意気投合していた。

異臭のする奴は納豆小僧で子鬼っぽいのはそのまま子鬼だった。

うん、納豆は気さくだね。

何でも納豆の話に出てきた奴良組って言う妖怪ヤクザの次期3代目がさっきの少年だとか。

そういえばリクオって僕が通ってる中学の1年生だから後輩、か。

態々人に会う義理もないから滅多に行かないし行っても授業受けないけどね…

「あ、その若頭とやらの伝言だ。“学校で会ったらよろしくな”と伝えてくれ」

帰る間に納豆達にそう伝言を残し、アリバイプロック腑罪証明で帰宅した。

第肆幕「昨日ぶり」 (後書き)

…わあ
W W

gg
gg
gg
W
W

第伍幕「清十字怪奇探偵団」(前書き)

「ふぁ…」

あれから数日。

僕はほぼ毎日奴良組にお邪魔している。

そんなでもって朝学校に来て屋上で睡眠を取った後、僕の通う浮世絵
中学校の一年生フロアの廊下にてリクオを探している。

リクオを探しながら廊下をぶらぶらと歩いているとふと声した。

「おや…家長さんと奴良君!! ちょうど良い所に!!」

「ゲッ」

「しまった!!」

うん、今の中にリクオの声もあった。

アリバイブロック

腑罪証明でその場所に行く。

…あ、ちゃんと周りにばれないように細工してあるから。

そして極自然に後ろからリクオの肩を叩く。

「リクオ…? どうしたんだ?」

「あっ麗さん!」

「誰?」

1年の間で可愛いとか騒がれてる子だ。
持前の受信感度で心を読んでみる。

…純粹、だ。

つーちゃんとかの事をちょっと怪しいと思ってるみたいだね。因みにつーちゃんとはつららこと雪女の事。遊びに行くうちにかなり仲良くなった。

「…僕は2年の龍ヶ崎麗。よろしくな、家長さん？」

そう言って手を差し出す。

実は僕が手を差し出すって言うのはかなりレアだ。

「えっ?! 何で私の名前…」

「何言ってるの。君2年の間で君かなり有名だってゆーのに。」

5本指のカナちゃんでしょ? そう付け足した僕に、

「1輪の麗先輩に知られてるなんて光栄です!!」

…?

「何それ。」

「それは私が説明しましょう!!」

何だこのワカメ。

「麗先輩は浮世絵中学1容姿端麗な事により、浮世絵中の高値の華として1輪と呼ばれているのです!!」

「…そ。」

このワカメヘアーはウザいな…。

でも、さ。それが真実を知ったら全部変わっちゃうのにねえ…?

「…ま、リクオはどうしてさっきゲツとか言ってたんだ？？」
「実は…」

第伍幕「清十字怪奇探偵団」

ギイイ…バアア…ン

「はぁ…すげえ…ここ…清継くんち？」

「ふふふ…ボクのプライベート資料室さ…」

現在地…ワカメヘアーこと、清継家プライベート資料室

さつきリクオから事情を聞いた所妖怪うんぬんで清継の家に集合と
かだったらしい。

まあ、妖怪の友達がまた増えるかもってことで僕も一応来たんだが。

「…成金」

思わずぼそりと呟く。

「うわ…なんか凄そうなのがたくさんあるなあ…」

リクオがそう言い、つーちゃんに何かを尋ねに行く。

「雪女…もといつらら…うちに物に取りついたりする妖怪と書いた
っけ？」

「…さあ？人形に取りついたりする者はいなかったと思いますけ
ど…付喪神かもしれませんよ…いわゆる現代的な。」

「ま、またそっちな…困るなあ、こんなご近所で」
「？」

そんな会話をするリクオ達に不思議そうな視線を送るゆら…だった
ろうか？

まあ名前知らなかったけど受信感度で色々見た。

「この…日本人形なんだけどね…」

「うわっ…なんか…いかにもな」

あ、何か話始まった。

「ほ、本当に…呪いの人形なん…？」

「信憑性は高いと思う。一生に持ち主の日記が残ってるんだ」

呪い、ねえ…。呪いと妖怪は違うと思うんだが。

「日記？」

「読んでみよう」

清継が日記の音読を始める。

「2月22日…引っ越しまで後7日。昨日、これを機に祖母からもらった日本人形を捨てることにした。といっても機会をうかがっていたが本当は怖くてなかなか捨てられなかっただけで、雨がふっていたが思いきって捨てた…」

言い終わると同時に僕がずっと見ていた日本人形から血の涙。

それを見て僕は受信感度をオンにする。

“イヤダ”

“捨テナイデ”

“イカナイデ”

…哀しい妖怪だな

清継はそれに気付かずに続ける。

「すると今日なぜか捨てたはずの人形が玄関に置いてあり目から血のような黒っぽい…」

そこまで言った所でリクオが人形にタツクル。

「どおしたー！！リクオー！！」

「貴重な資料にタツクルかますなー！！」

「ハハ…ごめん聞いてたらかわいそーで！」

「んなアホな！！」

…リクオ、可哀そうだったらタツクルはしないぞ。

「わ…若…？」

「うう…もしかしてこれ、やっぱ本物なのか…？」

「もちろん。」

そうごく自然に受け答えをする僕。

「ちょっと…見せてみる！！」

思いきりリクオを退かし人形を覗き込むワカメ。

「……………何ともなっていないか」

そりゃ拭いちゃったしね。

「まったく貴重な資料を…名誉会員から外してしまうよ…。まあいい、次だ。」

「……………」

あ、冷や汗。

「2月24日彼氏に行って遠くの山に捨ててきてもらった。その日の夜：彼氏から電話『助けてくれ：気付いたら後ろの座席にこいつが乗ってた：』」

「え？ど、どーなるのそれで。」

その声をまたもスルーして続けるワカメ。

「考えてみれば昔から変だったこの人形：気付けば髪が伸びているようにも見えた：」

あ、髪の毛モリモリ伸びてるー…。

「あ…若、麗さん…これ…」

「ああ…まずいぞ…」

「凍らしてしまいます!!」

「それはさすがにみんなの前じゃ駄目だと思うけど？」

清継は気付かない…。うん、哀れ。

「2月28日引っ越し前日。おかしい…しまっておいた箱が開いている…」

「日記を…読むのをやめてええー!!」

そう叫ぶリクオの後ろで刀を振り下ろす人形。
その間に体を滑り込ませ刀を掴もうとする。

ゴッ! !

何やら特殊な紙が人形に張り付き、痛々しい音。

「! ?」

驚く一同。

「浮世絵町…やはり追った。陰陽師花開院家けいかいんけの名において…物の怪よ、あなたをこの世から…滅死ます!!」

「……………!」

「な…」

「なんだあゝ!!」

第五幕「清十字怪奇探偵団」(後書き)

…中途半端ですねごめんなさい
W
W

第陸幕「陰陽師」(前書き)

「…お…陰陽師だって!?! け…花開院さん!?! 今…確かに…あなた
そう…逝ったんだね!?!」

それに頷く花開院ゆら。

第陸幕「陰陽師」

「じゃ…じゃあ…コイツは…今、まさか…」

シャアアア!!

そう威嚇した人形。

「うわっつやっぱり妖怪なんだあ!!」

「ええ…本当にあぶないところでした。」

そんな会話も聞こえない。啞然とする僕。

“何で?”それがずっと頭の中を回ってる。

「れ…麗さん？」

そう言ったリクオの声で我に帰る。

「っ…」

顔を一瞬歪めたものの、その人形に近づく。

「れっ麗さん?!何してるんですか?!」

僕の行動に驚いたゆらが怒鳴る。

僕はそれも聞かず札をはがす。

そして剥がし終わって、人形に手をかざす。

「…大嘘つき…ッ」

「「「「ッ?！」」「」」」」

一同が驚いた顔をした。

何故なら、僕が人形を元に戻したからだ。

「麗さんっ?! あんた何やってん?!」

ゆらに肩を掴まれる。

「何…? これは間違っているのか…?」

鋭くゆらを睨みつければひるむゆら。

「当たり前やろ?! 妖怪は危険や!!」

「…分かんないよ。僕には、さ。君には聞こえないから分からないだろ? この子の声が…」

それに訳が分からないという顔をするゆら。

「捨てないでって言ってたよ。22日の日記を読んだ時、言わなかったけど泣いてた…」

静まり返る部屋。

「清継。これ貰って良いか? もう妖怪じゃないからさ。」

「あ、ああ…」

「ありがと。」

それに反応するゆら。

「まっ待ってえ!! 妖怪じゃないってどういう事や?!」

「…その言葉の通りだよ。僕の大嘘つきは、オールマイクシオン現実をなかった事にする能力さ。だからこの人形が“妖怪だ”という事実をなかったことにしただけさ。」

「なんやそれ?! お前も妖怪何か?!」

…ただそれだけだったらどんなに良かっただろうね。

「違うよ…。僕は妖怪じゃない。?」

「でもただの人間にそんな事「そうだよ。だから僕はただの人間じゃない。…ただの、化け物だよ。」

そう言ってその場を腑罪証明で立ち去った。アリバイプロック

第陸幕「陰陽師」(後書き)

あゝーあゝww意味分かんなくなってきたよ!!
：こっからどーしよう。

というか短すぎた気がする。

うん、きつと200字ぎりだろ。

第質幕「旧鼠」(前書き)

「あゝー…うゝー…」

やらかしてしまった。

久しぶりに良い子と友達になれそうだったのにやらかした。

…でもいつか…。

より堂々と妖怪の手伝いできるかもしれんし。

第質幕「旧鼠」

ゾクリ。

「…ッ?!」

異様な気配がして、思わず声が漏れる。
これ、妖怪…だな。

だけど鴉もどきとかとは少し違う。

…一言でいえば、嫌悪を感じるものだ。

少し気配を探ってみる。

「…?」

なんでカナの気配まである…?

その近くにゆらとかいうクソ陰陽師まで居る。

さて、どうしようか。

カナは別に助けるのも異存はないんだがな…。

ま、陰陽師だけはほっとくか…。

すぐさま腑罪証明でそこに移動する。
アリバイブロック

そこは薄暗い路地裏だった。

「れ、麗さん?!」

「…」

「誰だテメエ?!」

「あ、あんた?!」

カナの声には返事を返さなかった。

陰陽師の言葉は完全シカト。

そして目の前の妖怪に目を向け陰陽師に向かって言葉を放つ。

「…陰陽師じゃなく、カナを助けに来ただけだからな。後、陰陽師とカナはある程度僕から距離を置け。陰陽師はカナをちゃんと守れ」

そう言って致死武器^{スカーデット}をオンにする。

「何だデメエー!!」

そう言って向かって来る妖怪にボソリ、呟く。

「馬鹿な奴…」

妖怪と僕との距離は1m。

「がア…ッ?!」

途端に目の前の奴らから血が噴き出す。

「てめえ…?!何をした!!」

「愚問だな。僕は何もしてなどいないさ。ただ君達が近づいてきたら血が噴き出してきただけだろう?」

「ふざけるな!!」

「ふざけてなどいない。後、今血が噴き出している所…君達全員、昔そこに怪我をしただろう?」

苦しみもがきながらも何だそれ、という顔をする妖怪達。

「君たち、血の気多いから今までいろーんな敵と戦って小さな傷も大きな傷も負ってきただろう？」

「それがっ…どうし、たア?!」

息も絶え絶えになっている妖怪たちのもとへ自分から近づき、しゃがみ、その耳元で囁いた。

「僕の致死武器^{スカーデット}はな、ある一定の距離に近づいてきた奴らの古傷を一気に開くんだよ…。それも、相手が今まで負ってきた傷…全部、な。蚊に刺されたとか、火傷とか虫歯も古傷何だぞ？」

「があああ!!!」

聞こえてないな、うん。

そう呑気に考えていたがパチンと言う指が鳴る音にハツとする。

「キャアア!! イヤっ…ネズミが!?!」

「!?! やめ…ッ! その娘に何するんや!! 貪狼…!」

そしてカナの悲鳴とゆらの焦りを煽る声。

「やめとけ…ネズミはいくらでも増やせる。大人しく式神をしまえ! そっちの女はその妙な術を解け!!」

次には妖怪の鋭く敵意のこもった声。

…いや、僕からしたら可愛いくらいなんだけどね。

でも、ここで続けたら下手をすればカナちゃんが、死ぬ…。
そう思って致死武器を消す。

「あ…と、これといても開いた傷がふさがる訳じゃないからな。」

僕も傷を塞げるとかそういうのは持ってないから勘弁…。と付け足す。

…ここは、僕が着いて行っちゃうより一回奴良組に行ってリクオに連絡した方が早いかな？

「…じゃーね。」

そう言葉を放ち、アリバイブロック腑罪証明で消える間際にカナちゃんに口パクで“絶対助けに来るから”と言ってから僕はその場から消えた。

第質幕「旧鼠」(後書き)

あ…一週間近く放置で済みませんでしたっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0287v/>

人間不信の異常で過負荷な少女、そして百鬼夜行の主。

2011年10月9日10時24分発行